

日本人の自然観

——和歌に現われた自然観の展開——

夜久 正雄

標題の「日本人の自然観」というテーマを、漠然と考えてもしかたがないので、「和歌に現われた自然観」というテーマに変えてみた。この場合の「自然」とは、「天地、海山、山川草木」の意味である。

この意味での「自然」に対する人間の態度には、哲学的、宗教的、科学的、功利的などさまざまな態度がありうると考えられるので、「自然観」ということも、さまざまでありうると思う。その中で、「和歌に現われた自然観」ということに問題をしぼるわけであるから、この「自然観」は、一面的であるとみてよい。

しかし、和歌は、有史以来、日本人に親しまれてきた詩形であって、今日でもわれわれは、千数百年前の、例えば柿本人麿の和歌を読んで感動するのであるから、そこに一貫するものがあることを認めざるを得ない。つまり、和歌に現われた人麿の自然観は、

今日のわれわれの心にも通じるものがあって、それは、和歌という詩形が一貫したことと同じように、日本人の心に一貫するものを持っている、ということになる。もっと平たく言えば、われわれは、人麿の自然観の影響の下にあるということなのである。

自然を和歌に詠みこむ、ということは、それだけで、自然に対するひとつの態度とみることができるとは、それだけで、自然に対してもいへば態度と言えよう。その、和歌で自然を詠むことが、有史以来連続として今日まで伝えられている、ということは、和歌の自然観が有史以来生きてきた、ということである。その内容を説明するのはむずかしいが、ともかくそれが今日まで生きてきている、ということは、そういう態度が、日本人の心に、バックボーンとして生きてきた、と考えてよいのではないか。これを変革しようとするかどうかは各人の意志であるが、それはそれとし

て、生きている現実として認めなければなるまいと思う。そこで「和歌的自然観」とはどういうものか、ということになるが、「和歌」は「詩」であるし、「詩」は「文学」であるし、「文学」は「芸術」であるから、言い換えて、「詩的・文学的・芸術的自然観」と言ってもよい。だからと言って、反哲学的、反宗教的、反科学的というわけにはゆくまい。まあ、大ざっぱに言えば、「鑑賞的」な態度とは言えるが、果してこの言葉が、和歌のすべてを包括しうるのかどうか、私は知らない。ただ昔から、「まこと」とか「もののおはれ」とか「みやび」とか等々の言葉が、和歌の本質として述べられてきたことを記しておく。これを説こうとして千万言が費やされてきているのである。

ところで、「和歌に現われた自然観」と言えば、当然、「自然を詠んだ和歌」ということになり、抒情詩に対する叙景詩ということになるが、叙景詩の中にも、歴史的な変化もあり、個性的な差もあって、一概には述べられない。ただ、今度、このテーマのもとに、『古事記』から明治時代の子規と明治天皇の和歌までを通観してみたので、いくつかの例をあげて説明してみたい。「叙景」と言っても、和歌に詠む以上は、そこに己れの影を認めての叙景であることは言うまでもない——対象としての自然と一体になるという性質は一貫するが、その一体感にまたある色合いの差があると思われる。

(一) 『古事記』の中に叙景的な和歌がある。『古事記』は七二二

年成立であるが、中の歌謡はそれより以前のものとみられるので、製作年代としては、最も古いものとみてよいであろう。その中に既に、次の二首のような、極めて叙景的な和歌がある。

○狭井河よ雲立ち渡り畝火山木の葉さやきぬ風吹かむとす
(イスケヨリヒメ)

○なづきの田の稻幹に稻幹にはひもとほろふところづら(倭建命の御陵を作る時の歌)

これを『古事記』では、前の和歌については、国の危急を御子さまがたに伝えるための母妃イスケヨリヒメの歌とし、後の歌は、御陵の「なづき田に這ひもとほりて、哭きまして歌ひたまひしく」と説明している。ともに、強烈な情意を示すものとして物語の中に掲げられている。作者の情緒が自然を渾融して、自然は情緒の表現の材料として示されている。いわゆる客観的な叙景ではない。自然の中に自己が入ってゆくというよりも、自然を自己の方にひきつけている。そういう意味での一体感である。言ってみれば、主観的叙景とでもいうべきであろう。

(二) 『万葉集』から、まず、次の例をあげる。

中大兄三山の歌

○香具山は 畝火を惜しと 耳梨と 相あらそひき 神代より かくにあるらし 古へも しかなれこそ うつせみも 孀を あらそふらしき

反歌

○香具山と耳梨山とあひし時立ちて見に來し印南国原

○わたつみの豊旗雲に入日見し今宵の月夜さやに照りこそ

柿本人麿二首

○東の野に炎の立つ見えてかへりみすれば月傾きぬ

○もののふの八十氏川の網代木にいきよふ波のゆくへ知らず

も

中大兄(天智天皇)の「三山の歌」の「香具山は 歌火を惜し

と 耳梨と 相あらそひき」という三山の叙事は、神話であるが、

それは「うつせみも婦をあらそふ」という人生の事実の表現である、とするのである。(一)の『古事記』の歌と共通な面がある。つまり、自然を神話として語るのは、人生事実の痛感によるのであるから、自然神話とは、自然に対する情緒の投影である。これを

「三山の歌」は説明したのである。それで、(二)の主観的叙景詩の前に、神話的叙景のあったことが、推察されるのである。「三山の歌」の反歌の「わたつみの豊旗雲に」の歌や、柿本人麿の歌も、『古事記』の二例と同じように、主観的の叙景歌とみられる。人生についての感動が優勢で、それが生(なま)のまま、叙景の中にこめられているという感じがするのである。川出麻須美という詩人は、人麿の歌に、「中今」の歴史観を見ている。単純な叙景ではない。

『万葉集』の和歌は、相聞と挽歌とが中心テーマであると言われるほどで、ほとんど全篇が、抒情歌であって、客観的叙景の歌

を見つけ出すのは、大変むずかしかった。次の山部赤人の歌などが、その例として挙げられよう。

山部赤人

○田児の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ不尽の高嶺に雪は降りける

りける

○み吉野の象山の際の木末にはここだもさわく鳥の声かも

作者未詳

○落ち激ち流るる水の磐に触れ淀める淀に月の影見ゆ

具象的に鑑賞的に自然を詠じていて、自然の中に啓示を得るといふような気味合いが薄い。つまり、今日の我々の自然観に近いのではあるまいか。と言っても、今日の我々に、これだけの和歌はできないのであるから、当時に、和歌による自然観は、最高の水準に達してしまつた、というほかない。その意味で日本人の自然観は、『万葉集』の時代に既に、ある意味では最高のレベルに達してしまつたのである。それが、今日のわれわれをして、自然との一体感を感じとらせるという感受性の源流となつたのである。

(三)『古今集』では、四季の移ろいを詠じた歌が多い。自然は四季としてとらえられたのである。

○袖ひぢてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくら

む(紀貫之「春たちける日よめる」)

○あききぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろか

れぬる（藤原敏行「秋立つ日よめる」）

(四) 『新古今集』の象徴詩的な詠みぶりは、自然の一部分に人生を象徴する。そして、「神祇」「釈教」の歌は、自然を神意仏道の啓示とするのである。自然を象徴として捉える。

○はるの夜のゆめのうき橋とだえして峯にわかるる横雲のそら（藤原定家）

○いつしかと萩の葉むけの片よりにそそや秋とぞ風もきこゆる（崇徳院御歌）

○ゆふしでの風にみだるる音さえて庭しろたへに雪ぞつもれる（社頭雪といふ心をよみ侍りける）按察使公通「神祇」

○闇はれてこころのそらにすむ月は西の山辺やちかくなるらむ（観心をよみ侍りける）西行法師「釈教」

(四) 『金槐和歌集』は不思議な歌集である。神儒仏三道をすべて自己の人生体験の表現にかしこんだためであろう、歌を詠むことが思想の中心となり思想の表現となる、そういう道を開いたのである。自然表現が作者の思想表現となつたすばらしい思想詩が誕生したのである。

○大海の磯もどろによる波のわれて砕けてさけて散るかも
(六) 近代に至って、正岡子規は、いわゆる「写生」の歌を作り、連作短歌を開いて、和歌の中に自然描写の道を開いた。その写実的叙景は、科学的自然観察の尊ばれた近代化の思潮に投じて成功したが、彼の和歌は、私は俳句もそうだと思うが、むしろ抒情詩

として成功したと思う。

○松の葉の細き葉毎に置く露の千露もゆらに玉もこぼれず

（雨中庭前の松を見て作る）連作十首の第一首）

○ほととぎす鳴くに首あげガラス戸の外面を見ればよき月夜

なり（病床即事）連作十首の第一首）

○佐保神の別れかなしも来ん春にふたたび会はんわれならなくに（しひて筆をとりて）連作十首の第一首）

末期の目に映じた自然は、限らない愛惜の対象で、宗教的な憧憬とさえ感じられる。子規にとって、自然は帰依の対象となつたかとさえ感じられるのである。

一方、明治天皇の御製の中には、自然の中に人生法則を読みとられた思想的抒情詩の数々の傑作を揮うことができる。

○あさみどり澄みわたりたる大空の広きをおのが心ともがな

（天）

○久方のおまつ空にも浮雲のまよはぬ日こそすくなかりけれ
（天）

こういう歌を民衆が愛唱するところに、「日本人の自然観」の基礎があると思われるのである。

（やく・まさお、国文学、亜細亜大学教授）